

JASC2023 年度第2回定例会プログラム

- ・日時：2023年9月17日(日)13:30-16:30(予定)
- ・場所：オンライン(Zoom)

13:30-13:40 開会

【第一部：研究発表会】 発表15分 質疑応答5分

13:40-14:00

「科学技術機能を含むデモンストレーションの伝搬構造の検討」
藤吉隆雄(津田塾大学 総合政策研究所)

14:00-14:20

「学芸員養成課程の問題点 - 教学マネジメントの観点から -」
藤田 茂(目白大学)

14:20-14:40

「当大学病院における医学サイエンスコミュニケーション活動の過去・現在・未来」
松原宗明¹、岩見幸枝²、小谷美咲²、関水千夏²、平松祐司¹
筑波大学 医学医療系 心臓血管外科¹、筑波大学附属病院 看護部²

14:40-14:50 「休憩」

【第二部：情報交換会】

- 14:50-15:00 第一部の登壇者様への追加の質疑応答
- 15:00-15:05 座談会の進め方を説明
- 15:05-15:30 グループで自己紹介と座談会
- 15:30-15:40 グループで出た意見をメインセッションで共有
- 15:40-15:45 休憩
- 15:45-16:10 グループで座談会
- 16:10-16:20 グループで出た意見をメインセッションで共有
- 16:20-16:30 記念撮影・閉会

科学技術機能を含むデモンストレーションの伝搬構造の検討

藤吉隆雄(津田塾大)

1. 背景・目的

科学技術コミュニケーターの技能の一つとして演示実験があげられることがある。これは、科学技術の機能にもとづき、科学技術をわかりやすく魅力的に示す手法とされている。この演示実験は、科学技術に限定しないならば、デモンストレーションの一種だととらえることができるであろう。となると、演示実験は科学技術機能を含むデモンストレーションである。

そこで、デモンストレーションの構造を検討し、そのうえで、科学技術を含むデモンストレーションを事例として検討する。本報告では、デモンストレーションの内部構造、特に情報の伝搬構造に着目し、情報の変質を検討する。

2. 方法

次の方法により、科学技術機能を含むデモンストレーションの伝搬構造を検討する。

1. 情報の伝搬に着目してデモンストレーションを要素に分解し、その基礎的な関係を図示する。
2. デモンストレーションが行われる場をイベントとしてとらえ、カット／ダヤーンのメディア・イベント論にもとづき、その関係を図示する。
3. デモンストレーションを作品としてとらえ、藤吉により拡張を検討された伊藤のマンガ総体モデルにもとづき、その関係を図示する。
4. デモンストレーションにおける情報の解釈過程に着目し、ホールのエンコード／デコード理論にもとづき、その関係を図示する。
5. デモンストレーションにおける情報の変質過程に着目し、シャノンの通信システムモデルにもとづき、その関係を図示する。
6. 伝搬構造を総合的に検討し、科学技術機能を含むデモンストレーションの特徴を検討する。

3. 結果・考察

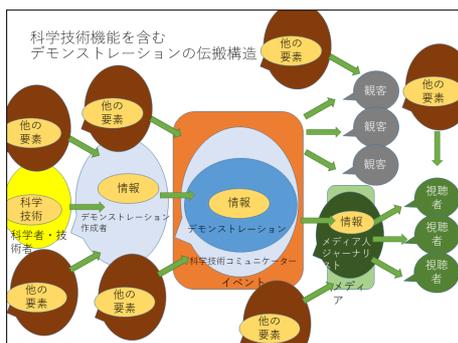


図1: 科学技術機能を含むデモンストレーションの伝搬構造

図1に示す科学技術機能を含むデモンストレーションの伝搬構造が得られ、次の特徴があると考えられた。

1. 科学技術機能を含むデモンストレーションの内部構造は模式的に、科学技術の知識、様式、技能、環境に分割できる。
2. エンコード過程では、デモンストレーション作成者、デモンストレーター、ジャーナリストの知識レベルで情報が変質する。
3. デコード過程では、メディア人・ジャーナリストの知識レベルで情報が変質する。また、メディアでは再エンコードされる。
4. 他の社会的・文化的要素が人的要素に取り込まれることで、情報の変質が起こる。
5. デコーディングの支配的コード、交渉的コード、対抗的コードは前過程までのすべての人的要素に向けられる。
6. デコード衝突は人的要素の知識レベル差が原因ではないか。

謝辞

小河正義ジャーナリスト基金と倶進会／科学技術社会論学会・柿内賢信記念賞の支援に感謝します。

学芸員養成課程の問題点 - 教学マネジメントの観点から -

藤田 茂（目白大学）

本研究では、学芸員養成課程に関する問題点を3者の立場から整理し、教学マネジメントの観点からその課題を考察することを目的とする。

近年、学芸員養成課程を閉課する大学が緩やかに出現している。学芸員資格を取得しても学芸員として採用されることが困難だと周知され、学芸員資格を取得する学生数が年々減っていることが原因と考えられる。さらに、取りまとめる専任教員がいない、考古学・歴史学の専任教員が多く理工系の教員が少ない、授業内容が著しく逸脱しているなど問題は尽きず、同様の議論が15年以上も続いている。その間、「上級学芸員」「博物館士」「現在の学芸員を学芸員補にする」「学芸員（歴史学）という専門分野別にする」といった案が出たが、どれも実現していない。

1. 大学側の問題点

- ・単位の認定（学修，達成水準）
- ・授業内容・設備
- ・入試広報活動（資格商売）の限界

2. 学生側の問題点

- ・履修登録上の問題
- ・課程費用

3. 博物館側の問題点

- ・館園実習受け入れのキャパシティ
- ・実習内容
- ・就職活動，キャリアパス

4. 教学マネジメントの方向性

- ・学芸員課程に入課するための学内試験を実施する
- ・履修に余裕を持たせる
- ・短期間の館園実習ではなく長期インターン化
- ・博物館学を専門とする専任教員の必置

当大学病院における医学サイエンスコミュニケーション活動の 過去・現在・未来

○松原宗明¹、岩見幸枝²、小谷美咲²、関水千夏²、平松祐司¹
筑波大学 医学医療系 心臓血管外科¹、筑波大学附属病院 看護部²

1. 研究の背景と目的

特殊環境が重なる大学病院では、子ども達に『医学』という科学の面白さやその社会的意義を教示する行える医学サイエンスコミュニケーション活動は一般的に制限が多い。しかし大学の知的財産や医学領域独自の周囲との接点を上手く利活用することで、体系的な学校教育とは異なる自立的で協働的な学びや、新しい価値感の創成を子ども達に醸成し得ることは可能である。そういった背景に即し2015年より当院で行ってきた医科学リテラシーの涵養活動の意義を振り返り、将来の展望についても検討する。

2. 方法

当院で行ってきた3つのプログラムを紹介する。①健常児に講義や実習を受けながら最先端の医学医療現場の実体験が可能な『キッズメディカルユニバーシティ』②生まれつきの心臓病や障害を抱えながら生活する『医療依存度の高い』子どもや家族に、難病をかかえる同じ境遇の友達との大切な時間や、子ども自らの病気への理解・知識の習得を促しうる医療ケア付きキャンプ場への無償招待③コロナ禍で長期入院中の難病とたたかう子ども達に大自然を兼ね備えたキャンプ場との『オンライン院内学級』

3. 結果及び考察

①は2015年、②は2017年、③は2021年より各々開催した。①はグロースマインドセットを育める絶好の機会となり、同時に「やればできる」というポジティブな自己充足的予言を子どもたちに習得させる大事さが判明した。②では特殊な機会を経ることで『病気の認識の重要性や日常生活に順応するための意識改革を認識することが出来た。③では抑圧的な状況に置かれやすい病気療養児の心理的な安定を図れるだけでなく、心を豊潤にする情操教育の大事さを認識し得た。今後はこういった経験を糧に単に楽しいメディカルサイエンスの世界に子どもたちを招くだけでなく、学校外教育だからこそ得られる豊かな医科学教育資源を子どもたちに実感してもらい、医科学技術リテラシーの涵養活動のさらなる体系化と新たな学習プログラムの開発を進めていきたい。

